07

言語接触
――音声言語と接触中の手話言語の語彙と形態法――

ベンジャミン・ギブソン
（テンプル大学［アメリカ］）

要旨

言語接触に関しては、主に 2 つ以上の音声言語間の接触の影響について研究が行われてきた。手話言語の接触は、近年に研究が始まったばかりである。本研究は、音声言語と手話言語のペアについて、語彙的、意味的、さらに形態的な類似性と差異を検討することを目的とする。比較対象とするペアは、アメリカ英語とアメリカ手話（ASL）、イベリア半島のスペイン語とスペイン手話（LSE）、ロシア語とロシア手話 （RSE）を選択した。語彙と形態法を選んだのは、語彙は言語において接触の影響を最も受けやすい側面であり、形態法はその言語に新しい語彙を創り出すという点において語彙とは切り離せないからである。比較を行うために、始めに音声言語の形態法について精査した。次に以下の 4 つの語彙的な性質を調べるためにビデオ辞書の調査を行った。平行的多義語（複数の定義を持つ音声単語、その語に対応する手話単語）、非平行的多義語（複数の定義を持つ音声単語、その定義に対応する手話単語）、多機能性（音声単語もしくは手話単語で 2 つ以上の語彙的なカテゴリーに属するもの）、複合語である。

形態法については、ビデオ辞書と当該の手話言語について出版されている研究を合わせて調査し、アメリカ手話についての教本も参照した。これらの 3 つの言語の音声単語と手話単語の全てを網羅する量的な調査は不可能と考えられることから、調査は全て質的調査である。語彙に関しては、平行的多義語と複合語では、音声言語と手話言語の間に明らかな関連が見られた。これに対して非並行的多義語と多機能性では、逆の傾向が観察された。

形態法では、語彙に比べて手話言語は音声言語からはるかに独立的であることが明らかになった。手話言語独自の豊かな形態法は、多くの語彙素を含む手話単語 （intralexemic signs）、動詞と目的語の一致を示す方向指示の手話単語、名詞と動詞のペア、手話言語のテンス・ムード・アスペクト体系などの点において音声言語とは一致しない。

結論として、音声言語は疑いもなく手話言語に多くの語彙的な点で影響を及ぼしているけれども、形態的な側面に関しては、遥かに影響は弱く、手話言語はそれ自身の内部で言語学的に発達する力を持っている。

本研究の最大の問題点は、語単独の調査を行ったため、現実世界の会話で文脈が与えられれば発話が異なるであろうことである。スペイン手話とロシア手話はビデオ辞書と文献による調査のみで話者が得られなかった点も問題である。

統語論などこれらの言語の他の側面や、3 つの言語で使用されているようなアルファベットを使わない言語の音声と手話のペアについて、手話言語と音声

言語の歴史的変化の差異についてなどは今後の課題としたい。